



TITLE:

# 十九世紀児童文学における学校教育批判 --エクトール・マロ『家なき子』における「独学者」の表象をめぐって

AUTHOR(S):

渡辺, 貴規子

---

CITATION:

渡辺, 貴規子. 十九世紀児童文学における学校教育批判 --エクトール・マロ『家なき子』における「独学者」の表象をめぐって. 仏文研究 2017, 48: 103-123

ISSUE DATE:

2017-10-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/228184>

RIGHT:

許諾条件により本文は2018-11-01に公開

# 十九世紀児童文学における学校教育批判

## ——エクトール・マロ『家なき子』における「独学者」の表象をめぐって

渡辺 貴規子

十九世紀後半の代表的なフランス児童文学作品、エクトール・マロ (Hector Malot, 1830-1907) の『家なき子』(原題: *Sans famille*, 1878) は、主人公レミの8歳から12歳までの成長が描かれ、児童教育を重要な主題の一つとする。この作品が刊行された1878年は、フランスが普仏戦争の敗北を経験して間もない時期であると同時に、第三共和政初期のフランス共和国議会において、共和主義的初等教育改革がまさに審議され、準備された時期であった。作品刊行のわずか数年後、1881年から1882年には、初等教育の「義務・無償・世俗」の三原則を法定したいわゆるジュール・フェリー法が成立し、それ以後の小学校はしばしば、「共和国の小学校」と呼ばれるようになった<sup>1</sup>。先行研究では、『家なき子』に将来のフランス共和国国民の育成に資する内容が含有されることが指摘され<sup>2</sup>、また実際に、この小説の記述には「共和国の小学校」の教育内容の多くが含みこまれている<sup>3</sup>。共和主義者であった作者マロが、当時進行中であった初等教育改革を意識し、近い将来に実現される「共和国の小学校」の教育内容に沿うことを意図しながら、この児童文学作品を執筆したことは確かであろう。

しかし同時に、それと矛盾するようではあるが、『家なき子』には学校教育そのものを批判し、ときに否定するような記述が複数箇所にわたり見られる。そして学校教育に代替する教育のあり方のひとつとして、小説内で礼賛されたのは、1830年代以降に労働者階級の人々の中に顕在するようになった「独学者 (autodidacte)」の自己教育であったと考えられる。本稿では、『家なき子』における「独学者」の表象、及び「独学者」の自己教育に対するマロの評価に焦点を当て、そこから読み取れる学校教育批判と、小説内で提示された児童教育の目的について論じる。

『家なき子』における学校教育批判についての先行研究は少ない。その中でも詳細な検討を行ったのはイヴ・パンセの博士論文であった<sup>4</sup>。パンセは『家なき子』で提示された児童教育の方法と、従来の学校教育のそれとを比較し、前者には、後者にはない「新たな教育の潮流<sup>5</sup>」の教育方法が適用され、とくに、教育学者ペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827) とフレーベル (Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852) の唱えた教育方法が援用された点について指摘した。この指摘は、『家なき子』における学校教育批判の記述を検討するためばかりでなく、マロの教育思想を考察する上で非常に重要な指摘である。

しかし、パンセの論で着目されたのは、児童教育における教授者側の態度と思考であり、学習者側のそれではなかった。『家なき子』には学校教育を受けない「独学者」の自己教育に対する

礼賛が複数箇所において見受けられ、その記述は同時に学校教育批判を成すと考えられる。パンセの論では、マロの教育観の中に「独学者」に対する礼賛があることには言及されながらも<sup>6</sup>、フランスで「独学者」が顕在化した歴史的経緯は把握されず、『家なき子』における「独学者」の表象についての言及もない。

筆者が、『家なき子』における「独学者」に注目するのは、次の三点の理由による。第一に、学校教育を受けない「独学者」をモデルとした登場人物は、マロの複数の小説に登場するが、とりわけ『家なき子』には多く登場するからである。第二に、マロの伝記的事実において、1850年代後半から1860年代に、身近に「独学者」である労働者を実際に知っていた可能性が高いためである。また、1860年代から1870年代のフランスは、民衆図書館(bibliothèque populaire)設置運動の隆盛期にあたり、労働者階級の人々への読書活動の普及が模索された時期であったが、マロはそれに賛同を示し、彼らの自己教育について関心を示したからである。第三に、『家なき子』における「独学者」の表象を検討し、パンセの論を補足し、両者を合わせて考えることで、マロがなぜ学校教育を批判し、児童教育の目的をどのように捉えたかが、より明確になるからである。

本稿では、まず第一章において『家なき子』における学校教育批判に関するパンセの指摘を紹介する。第二章において、「独学者」が顕在化した歴史的経緯、および「独学者」の学習の特徴を整理する。第三章で、マロと「独学者」との接点の可能性を指摘するとともに、1860年代のマロの「独学者」に対する関心について述べる。そして第四章で、『家なき子』における「独学者」の表象を提示し、第五章では、『家なき子』における「独学者」の表象と学校教育批判との関係について述べる。結論において、パンセの論と、『家なき子』における「独学者」の表象の分析との両者から、『家なき子』における児童教育の目的を再考する。

## 1. 『家なき子』における学校教育批判についての先行研究——イヴ・パンセの指摘

パンセは博士論文において、マロの児童文学作品『ロマン・カルブリス』(原題: *Romain Kalbris*, 1867)、『家なき娘』(原題: *En famille*, 1893)とともに、『家なき子』における学校教育批判を分析し、それを次の二点のうちに見出した。第一に、知識偏重型の詰め込み教育に対する批判である<sup>7</sup>。多くの知識を、その背景や連関を無視して、断片的・分節的に教授する教育方法に対して、マロは批判的な意見を抱いていた。そうした教育では、知識を受け取る側の生徒の状態にも関心が払われなかった。第二に、学校教師の教育手腕の欠如と無知に対する批判である<sup>8</sup>。パンセは、とくに1880年代前半までのマロの文学作品において、学校教師に対して信頼が置かれず、児童の両親など、生徒により身近な立場の人間の方が教育者としてふさわしいとされ、学校教育よりも、家庭教育が重視されると指摘した。これら二点に集約される学校教育批判が『家なき子』において展開されたのは、当時の学校教育の実態を反映してのことであると同時に<sup>9</sup>、作者マロ自身のコレージュ時代の経験、つまり、教師から一方的に押し付けられる教育に対して反発を覚えた経験が根本にあるとパンセは指摘した<sup>10</sup>。

そのような学校教育の欠点を克服するものとして、『家なき子』において提示された児童教育の特徴をパンセは、第一に「父親のような教師<sup>11</sup>」である教育者の登場<sup>12</sup>、第二に児童の身体発達と精神の自発性を尊重する教育方法<sup>13</sup>に見出した。そして、第一の教育者の模範としてマロが想起したのが、マロのリセ時代の歴史教師で、マロが信頼していたマルゲリットとシェルエルではないかと推測し<sup>14</sup>、また第二の教育方法の模範としたのがペスタロッツとフレーベルの教育理論と実践であって、マロの教育思想の哲学的基盤に経験主義と実証主義があることを指摘した<sup>15</sup>。児童の信頼する身近な人間による、家庭教育を模した児童教育、そして、児童の身体の発達と好奇心とを重視し、実物教育により児童自身に観察と思考を促して、その自発性を重視する教育方法は、まさにパンセの指摘するように、ペスタロッツとフレーベルの教育理論を援用したものであると考えられ、筆者も以前、それについて論じたことがある<sup>16</sup>。

こうしたパンセの指摘に加え、筆者は本稿において、マロが参照したと考えられるもう一つの模範、つまり、学習者の模範としての「独学者」に注目したい。パンセが『家なき子』に提示される教授者の特徴を指摘したのに対し、本稿で着目する「独学者」は学習者である児童自身の模範であると言える。それでは、「独学者」とはどのような人々であったのであろうか。

## 2. 「独学者」の歴史的背景

「独学者」とは、十八世紀後半から十九世紀前半にかけて、都市の手工業者や労働者の識字化が進み、深化したのを背景として、1830年頃から顕在化した、学習する職人・労働者層の人々を指す<sup>17</sup>。「独学者」に関する先行研究を参照しつつ<sup>18</sup>、彼らの学習の特徴について本稿では以下の三点に整理する。第一に、彼らの識字過程が学校教育だけによるものではなく、十人十色の多様な様相を呈した点である。第二に、彼らの自己教育は、しばしば、少年時代の読み書きや職業技術の習得にとどまらず、成人後も「昼の労働、夜の読書」という二重生活を送る形で続行された点である。第三に、学習の目的は大半の場合において、自己表現や周囲との差異化、階級上昇であり、「独学者」の中から、社会運動を先導するような知的エリートが発生する点である。

第一の特徴について、喜安朗によれば、十九世紀前半に少年時代を送り、自伝等の何らかの記録が残存する労働者や職人について、読み書きを習得する契機と過程はきわめて多様であり、学校教育は識字過程の一部分しか占めない。たとえば、ある者は父母や兄姉から読み書きを学び、ある者は数年間冬季のみ学校へ通うが習得に至らず、独習方式を考案したジョゼフ・ジャコト (Joseph Jacotot, 1770-1840) に学び、ある者はフランス巡歴や仕事場で、同僚や先輩の労働者に教えられた、という具合である<sup>19</sup>。1833年6月28日の初等教育法、いわゆるギゾー法によって、各コミューンに一校以上の小学校の設置が義務付けられたが<sup>20</sup>、この法律の制定後も学校教育による民衆の識字化の徹底には及ばない状況であった<sup>21</sup>。しかしそれでも、とくに都市部の職人や労働者の識字水準は高く、十九世紀前半における「独学者」の顕現には、職業上の必要と成功への希望に起因する、職人・労働者階層の識字能力に対する欲求の高さが表れている<sup>22</sup>。



第二の特徴について、読み書きを覚え、読書を中心とした手段によって成人後も学習を継続した多くの「独学者」たちに関し、マーティン・ライオンズは、彼らの読書による自己教育の努力はときに執念に近く、実際に、時間、経済、健康の面で犠牲を払い、全身全霊で勉学に臨まなければ、貧困や時間不足、個人生活の欠如により学習の継続は不可能であっただろうと述べた<sup>23</sup>。また、彼らの読書がありとあらゆるジャンルの本を貪欲に読む雑多な読書であって、テキストを記憶に刻み込む集中的な読書法が取られていたことも指摘された<sup>24</sup>。

民衆図書館が1840年前後から徐々に発生し、1860年代から1870年代にかけてその設置運動が活発化する<sup>25</sup>大きな要因として、こうした職人層・労働者層の人々の自己教育の要求があったことは明らかである。これらの民衆図書館は、一方では、職人や労働者の社会主義化や革命を恐れる人々によって設置や運営が妨害され、他方では、その設置運動の主要な目的の一つとして、「良書」による労働者階級の道徳化と社会統合が設定され、利用者の選書の自由が制限された<sup>26</sup>。しかし、1860年代には、比較的自由度の高い図書館が設立、運営される場合もあり、1860年代後半以降、民衆図書館は、その数を飛躍的に増加させた<sup>27</sup>。

第三の特徴として、「独学者」たちの読書による自己教育の結果、彼らの一部は、一方で詩や文章を書く創作活動を行い、また他方で、その知的能力によって、個人の利害を超えて社会活動に進出し、労働者の社会的地位の向上や機会均等を呼びかけるための様々なアソシアシオンを形成し、先導していくようになった。「独学者」とアソシアシオンの活動について焦点をあてた喜安朗は、1830年代から1850年代までの「独学者」の社会的結合と彼らの知的活動について、彼らの文章の内容や、寄稿した新聞等に拠りながら、五種に類別して説明した<sup>28</sup>。

さらに、1850年代末から1860年代は、1851年12月2日のクーデタ以後の弾圧により壊滅的な打撃を受けた労働者の活動が、部分的に再開された時期であった。そしてその状況下で第二帝政期に公に登場した最初の労働者グループが、『オピニオン・ナショナル』（*Opinion Nationale*, 1859年創刊）を機関紙としたパレ・ロワイヤルグループと呼ばれる集団であった<sup>29</sup>。木下賢一によると、パレ・ロワイヤルグループをはじめとする1860年代の労働者の活動の大きな特徴の一つは、それ以前の活動と比較して、労働者自身の自律性の必要がより強く意識されるようになった点である<sup>30</sup>。その意味で、「独学者」から発生した知的エリートの先導は重要であり<sup>31</sup>、労働者の解放のための自己教育の必要は強調された<sup>32</sup>。

1850年代末から1860年代において、マロはこうした「独学者」から派生した知的エリートたちの動向を観察する機会を持った可能性が高い。というのは、マロは1859年に文壇デビューした傍ら、同時期にジャーナリストとしての活動を通し、共和主義、社会主義に接近したが、彼が多くの記事を寄稿した重要な新聞の一つが『オピニオン・ナショナル』であったからである。

### 3. エクトール・マロの「独学者」に対する関心

マロが多数の記事を寄稿した『オピニオン・ナショナル』は、サン＝シモン主義者のアドル

フ・ゲルー (Adolphe Guérout, 1810-1872) が 1859 年に創刊した新聞で、ナポレオン三世の従弟、フランス・ナポレオン (Napoléon-Jérôme Bonaparte, dit prince Napoléon, 1822-1891) が指揮したパレ・ロワイヤルグループの機関紙であった。パレ・ロワイヤルグループとは、「皇帝社会主義」とも呼ばれるボナパルティスト左派で、労働者たちの要求を皇帝に直訴し、労働問題を解決しようとする立場であった。1862 年、『オピニオン・ナショナル』は英仏の労働者の交流と、労働者自身によるイギリスの労働環境の視察とを目的として、パリの職工をロンドンの万国博覧会に派遣した。この時の英仏の労働者たちの出会いは、第一インターナショナル発足の契機となり、労働者に階級闘争の自覚を促す結果を導いた<sup>33</sup>。

同時期、マロは同紙よりロンドン万博に派遣され、その時のルポルタージュが『イギリスの現代生活』(原題: *La Vie moderne en Angleterre*, 1862) として刊行された。マロは『オピニオン・ナショナル』において創刊当初から文芸批評を担当し、その他にも「道端の労働者たち」(1862 年 1 月 14 日) などの記事では<sup>34</sup>、労働者の生活環境の改善の必要を訴えた。マロがパレ・ロワイヤルグループの活動にどの程度関わったのか、現段階では判明していない。しかし、マロがこの新聞での活動を通し、労働者の生活・労働環境の改善の必要を実感するようになったことは、同紙の記事や『イギリスの現代生活』の中の記述から理解できる<sup>35</sup>。また、当時の『オピニオン・ナショナル』には青銅工のアンリ・トラン (Henri Tolain, 1828-1897) を筆頭に「労働者エリート」と呼ばれる、「独学者」から派生した知的エリートがおり、彼らの学習環境にも高い関心を払ったと考えられる。

従来のエクトール・マロ研究において、『オピニオン・ナショナル』についての言及には、マロの親友で批評家のジュール・ルヴァロワ (Jules Levallois, 1829-1903) の証言が参照され、その証言がおもに文芸欄に関するものであったため<sup>36</sup>、この新聞のフランス社会運動史における重要性には留意されなかった。しかしながら、以上のような歴史的経緯を把握すると、マロは 1860 年代の労働者の活動の再燃を、従来考えられていたよりも、もっと身近に目撃したと考えられる。

さらに、マロの「独学者」の自己教育への関心を示すものとして、民衆図書館の運営や、学校に行かない人々の独学を擁護する言説がある。マロは 1881 年 1 月 29 日にフォントネー＝スー＝ボワの民衆図書館監視委員になった<sup>37</sup>。しかし、マロの図書館に対する関心は 1860 年代より見受けられ、1862 年の『イギリスの現代生活』では、フランス帝国図書館における図書の閲覧方法と、大英博物館の資料閲覧室におけるそれとを比較し、フランスの図書館文化がイギリスに比べて遅れ、一般の利用者に不親切であることが嘆かれた<sup>38</sup>。さらに 1867 年 7 月 22 日の『クーリエ・フランセ』(*Courrier français*, 1861 年創刊) にマロが寄稿した記事では<sup>39</sup>、パリ万国博覧会のために来仏していたロシア皇帝、アレクサンドル二世をポーランド青年のアントニ・ベレゾフスキが暗殺未遂した事件の裁判と<sup>40</sup>、サン＝テチエンヌの民衆図書館の廃止を求める嘆願書が上院で審議された事件<sup>41</sup>について言及されつつ、民衆図書館と独学とが次のように擁護された。

政治的に有用な諸々の教訓を含み、複数の理由で興味深いこの訴訟 [(引用者註) = アン

トニ・ベレゾフスキの裁判]において、裁判長のベルトラン氏によって、残念な発言がなされた。裁判長は、不完全な教育ほど危険なものはない、というケースがしばしばあると信じているのだ。ベルトラン裁判長が、理工科学校や法科学院を卒業する方が相互学校を卒業するよりも快適であると言いたかったなら、われわれは、裁判長の意見にまったくもって賛成するであろう。[……] しかし、もし反対に、ベレゾフスキが完全な教育を受けていたとしたら、ロシア皇帝を暗殺しようとなどとしなかった、と言いたかったのであれば、我々はこの意見に異議申し立てをさせていただこう。この意見が個別的な例から一般論に発展すれば、その第一歩として民衆図書館を廃止し、最終段階に至ってはおそらく初等教育を廃止するような考えに行きつくからである。ベレゾフスキの自宅からは、弑逆に関するファン＝デ＝マリアナの本、『霊の書』、数号の『シエークル』紙と『モニトゥール』紙の夕刊が発見された。そしてこの奇妙な寄せ集めの読書から、不完全な教育の危険性へと結論付けられたのであろう。[……] しかし、完全な教育であろうと、不完全な教育であろうと、おそらく同じ結果であったろう。[……] この意見は[……] ベルトラン裁判長だけが持つ個人的な意見ではないということを覚えておいていただきたい。なぜならそれは、図書館の自由に反対する嘆願に相当する意見であるからだ。[……] サン＝テチエンヌの嘆願といい、上院での審議といい、重罪院での発言といい、遺憾な意見の一致である。まったく今週は、知育も徳育も不幸を被ったものだ。<sup>42</sup>

マロはこの記事において、民衆図書館を擁護し、ベレゾフスキのように相互学校だけを卒業して自力で読書する人々の「不完全な教育」や<sup>43</sup>、彼らが行う雑多な読書の社会的危険性を否定した。この記事からは少なくとも、学校に通う機会のない人々の自己教育をマロは好意的に捉えており、そのための有用な機関である民衆図書館の運営を支持していることが分かる。マロによれば、社会的危険性の観点から民衆図書館や独学を認めないことは、「知育も徳育も不幸を被」ることである。

こうした「独学者」に対する関心は小説にも反映され、複数のマロの小説作品では、さまざまな「独学者」が登場した。『ロマン・カルブリス』や『家なき娘』といった児童文学作品の中でも、「独学者」と思われる登場人物が児童教育の一部を担った。しかしながら、これら二作品や一般読者向けのマロの他作品と比較しても、『家なき子』における「独学者」は登場する人数が多く、児童教育の大半を彼らが担い、彼らの学習の様子についても説明が付された。そして後述するように、主人公自身が「独学者」として提示されたと考えられる。この意味で、『家なき子』は「独学者」の学習態度や彼らに対する礼賛が繰り返し強調された作品であると言える。それでは、『家なき子』では「独学者」はどのように表象されたのであろうか。

#### 4. 『家なき子』における「独学者」の表象

『家なき子』における児童教育を担う「独学者」は少なくとも三名登場する。主人公がパリで生活をともにする花作り農家であるアキャン家の父親、セヴェンヌ地方の炭鉱夫マジステール、主人公の親友マチアに音楽の手ほどきをするエスピナスースである。この三名に、主人公とともに旅をする旅芸人のヴィタリスを加えた四名から教育を授けられた主人公とマチア自身も「独学者」として提示された。

まず、教育を担う三名の「独学者」はどのように描かれたのであろうか。アキャン家の父親については以下のように書かれた。

おやじさんは、花作りとして独立する前に、パリの植物園の苗木育成場で働いていて、そこで様々な学者や専門家と出会い、彼らとの交流から、本を読んで勉強することに興味を持つようになった。何年もの間、おやじさんはお金を節約して本を買い、仕事のない時間を利用してそれらの本を読んだ。結婚して子どもたちが生まれると、自由な時間はほとんどなくなった。何よりも先に毎日のパンを稼がなくてはならなかったから、本を手にもすることがなくなったのだ。しかし本は紛失したわけではなく、売られもせずに戸棚にしまってあった。[……] 炉端ですごす夜の時間を有効に使うため、これらの古い本は子どもたちみんなに配られた。大部分は植物学や植物誌関係の書物で、旅行記もいくつかあった。[……] 僕は好奇心が強かったので、床に就かなければならない時間まで読み続けた。ヴィタリスから勉強の手ほどきを受けたことは無駄ではなかった。[……] 僕の学習意欲はおやじさんに、かつて彼が昼食代を二スーズつ節約して本を買ったことを思い出させた。それでおやじさんは、棚にある本のほかに、何冊か僕のためにパリで本を買ってきてくれた。たまたま目についたとか、表題からおもしろそうだと思われて選ばれた本だったが、とにかく本には変わりがなかった。おかげでまだ方向性の定まらない僕の頭は少々混乱したが、のちにはその混乱も解消して、そうした本の良い所は僕の頭に残った。どんな本でも、読むことは役にたつというのは、たしかに真実だ。<sup>44</sup>

本稿第二章で述べた「独学者」の特徴と比較し、学習の契機、学習方法、学習態度の点で、アキャン家の父親は「独学者」の典型例として提示されたと考えられる。花作り職人として労働する間に、職場で知り合った専門家から読書の手ほどきを受け、経済的に節約を行いながら、短い時間を惜しみ、仕事関係の本を中心に雑多な読書を行うことで学習を続行した。しかしそれは、子どもが生まれると同時に中断せざるをえないような、独身時代にやっと続行できた学習であった。主人公もまた、アキャン家の父親と出会うことで、読書による学習の習慣を受け継ぎ、その読書もまた、「たまたま目についたとか、表題からおもしろそうだと思われて選ばれた」さまざまな本を、「床に就かなければならない時間まで読み続け」という、時間を惜しむ、雑多な読書による学習で

あった。この引用の場面では、「独学者」であるアキャン家の父親の学習の説明と同時に、彼から主人公へのその伝達が書かれた。

実際に「独学者」の学習は、しばしば、職人同士や労働者の間で伝達されたとされるが<sup>45</sup>、『家なき子』の登場人物においてアキャン家の父親と同様の契機で学習を開始したのはマジステールである。マジステールは炭坑において、実在の地質学の権威アドルフ・ブロンニヤール（Adolphe Brongniart, 1801-1876）に出会い、その調査に立ち会ったことが学習の契機となったという設定である。その後の学習について、以下のようにマジステールは主人公に語って聞かせた。

人間の生活は、手だけではなく頭の中にもある。お前ぐらの年頃には、わしもお前と同じで好奇心旺盛だった。炭鉱の中で働いている間、そこで毎日見るものを良く知りたいと思った。技師たちが答えてくれる時には、いろいろと話を聞き出し、本も読んだ。怪我を負った事故の後は、自分の時間ができたから、その時間を使って勉強した。人は見るための目を持っていて、その目に、本を読むことで与えられる眼鏡をかけると、実に物事が良く見えるようになる。[……] お前にも自分の周囲にあるものをしっかり見ることを教えてやれたら、嬉しいよ。たった一つの言葉でも、肥沃な土のようないい耳に受けとめられれば、どれほど豊かな実をもたすか、はかりしれない。わしも、むかしベセージュ炭鉱の中を、ブロンニヤールという名の偉い学者を案内し、彼の調査の間に話を聞いたおかげで、学習しようと思い、そのために仲間よりもいづらか物知りになったのだ。<sup>46</sup>

このように、マジステールもまた、学習の契機が職場にあり、読書を学習の主要な手段とした。そして、その学習が彼を「仲間よりもいづらか物知り」にさせ、周囲からの差異化<sup>47</sup>も語られた。また、マジステールの場合、読書による学習のほかに、地質学の勉強を炭鉱で発掘される植物化石を集めて行ったりとされ、物語の中で彼は主人公に実物教育の手法を用いた、自然科学教育を施した<sup>48</sup>。

さらに『家なき子』における第三の「独学者」のエスピナスースは床屋であって、同時に音楽家である。小説の第二部において主人公とマチアに音楽の知識を授けるエスピナスースは、次のように実在の労働者詩人に例えられた。

私が床屋だからって、お前の先生になれないなんて思うなよ。人は生きて、食べて、飲んで、眠らなければならない。そしてそのためには剃刀が役に立つ。客の髭を剃っていたって、ジャスマンがフランスで最も偉大な詩人であることには変わらない。アジャンにジャスマンあり、マンドにエスピナスースあり、さ。<sup>49</sup>

このように、エスピナスースも昼間の労働の合間に音楽の勉強をした。そして、主人公との会話の中で、彼は自らを実在の床屋で、労働者詩人であるジャスマン（Jasmin, 1797 ou 1798 - 1864）<sup>50</sup>と比肩させた。エスピナスースもまた読書による独学を行っていたことが看取できる挿

話がある。主人公とマチアに楽典の知識を教えたあと、彼は自分の「とても古ぼけた、さんざん使ってよれよれになった<sup>51)</sup>」「『音楽理論』というタイトルのついた本<sup>52)</sup>」を二人に贈った。そして「それまでマチアは本を読むことにはいっこうに身を入れなかったが、クーン著の『音楽理論』を読み始めると驚くほど進歩した<sup>53)</sup>」と、主人公ばかりでなく、マチアにも読書による独学が伝達されたことが語られた。

これら三人の「独学者」に加え、児童に教育を受ける最も重要な男性の登場人物として、小説の第一部で主人公とともに旅をする旅芸人のヴィタリスがいる。ヴィタリスについては、物語の中で彼自身が「独学者」とされたかどうかは判然としない。しかしながら、ヴィタリスから読み書きを習得し、その後の学習の基礎を学んだ主人公はまさに、その識字過程においても「独学者」として表現されたと言える。つまり、主人公も、巡業の役者という職業に従事するかたわらで、師匠であり、音楽の専門家であるヴィタリスとの出会いによって学習の契機を得て、以下のように労働の合間に文字を覚えたのである。

僕の勉強は、学校に通って授業を受けている子のように規則正しくなく、僕の先生に時間ができたときだけ教えてもらえた。僕らは毎日村から村へと移って行かなくてはならなかった。[……] 見物人からお金を集められそうな場所がありさえすれば、どこででも興行しなくてはならなかった。犬たちやジョリクールには芸のおさらいをさせなくてはならなかった。毎日、昼食も夕食も自分たちで作らなければならなかった。こういうことを全部終えて、ようやく読み方や音楽に取りかかることができる。それは大抵、木陰か砂利山に腰を下ろして休む時で、草むらや道端を机の代わりにして、そこに木札を並べるのだった。<sup>54)</sup>

先行研究において、『家なき子』の主人公の旅は、リムーザン地方の寒村が出発点である点などから、しばしば職人のフランス巡歴を想起させると指摘されてきた<sup>55)</sup>。そして、その類似性は旅の方法だけにとどまらず、主人公の学習についても指摘できる。なぜなら、巡歴職人の中にも、主人公と同様に、旅と労働の合間に学習をした「独学者」が存在したからである<sup>56)</sup>。

さらにこの小説において、主人公が「独学者」として提示されたと考えられるもう一つの根拠は、小学校における識字化の失敗に言及された点である。主人公は一か月だけ村の小学校に通ったが、「その一か月の間に一度も本を手渡されたことはなく、読み方や書き方を聞いたこともなく、どんなこともなに一つ教えてもらわなかった<sup>57)</sup>」と書かれた。主人公が通った小学校では、教師の本職は木靴職人とお針子であって、兼業であったために子どもたちは預けられるだけであった。

このような村の小学校の描写に、十九世紀前半のフランスの小学校の様子が反映されたことは先行研究ですでに指摘されている<sup>58)</sup>。小説の中でも「現在、小学校で行われていることを基準にして、僕が今言ったことはありえないと決めつけてはいけない<sup>59)</sup>」と、それが1878年時点での「現在」の出来事でないということが付記された。ところで、十九世紀前半に顕現した「独学者」の手記や記録にも、小学校での識字化の失敗はしばしば書かれた<sup>60)</sup>。だからこそ、彼らの多くは職場の人間や、家族、個人的な知り合いの手ほどきによって識字化を遂げたのである。つまり、『家



『家なき子』の主人公は、物語において、十九世紀前半に少年時代を過ごした実際の「独学者」と同様な経緯をたどり識字化したと言える。

『家なき子』における村の小学校への言及は、「なに一つ教えてもらわなかった」小学校を描くことで、学校教育批判をなす目的があると、パンセの研究をはじめとした先行研究は指摘してきた<sup>61</sup>。しかし、それだけではなく、この挿話によって、主人公は実在の「独学者」によりリアリティをもって近づけられたと考えることもできる。『家なき子』の主人公は、識字化の過程においても、その後の学習においても「独学者」として提示されたのである。

## 5. 『家なき子』における「独学者」の礼賛と学校教育批判——学習者の態度に注目して

しかし、ここで一つ疑問が湧く。『家なき子』においてなぜ「独学者」は強調されるのであろうか、という疑問である。本稿の冒頭でも、『家なき子』には「共和国の小学校」の教育内容の多くが含みこまれ、作者マロが意識的に初等教育に沿う内容にしたと考えられる点については言及した。それなのになぜ、『家なき子』では小学校教育さえ受けない「独学者」の表象が何度も繰り返され、マロの他作品よりもいっそう顕著にあらわれるのであろうか。この矛盾はどのように説明されるのか。

この疑問に関し、筆者は次の二点において、マロが学習者としての「独学者」を礼賛し、「共和国の小学校」教育を受ける読者の児童たちにも、それを模範とさせたかったからではないかと考える。第一に、学習者自身が、強固な意志を持って学習に臨む点である。第二に、学習者自身が独力で主体的に生き、社会的上昇さえ可能にする力を身につけることを、学習の目的とする点である。

第一の点について、アキャン家の父親、マジステール、エスピナスースの学習態度に共通して書かれたのは、時間的、経済的な制限がある中での、学習に対する貪欲さであった。物語の中で主人公は、彼らから「学習意欲」を受け継ぎ、たった一つの言葉から何かを学ぶ「いい耳」があることを教わり、「さんざん使ってよれよれになった」本を贈られる。実際の「独学者」たちの自己教育の努力がときに執念に近いものであったと言われていることは先述した。そして『家なき子』における主人公を含む「独学者」たちも、強固な意志を持って学習に臨んだ。そしてそれは、マロによれば、学校教育を受ける者には欠落している要素であった。

この教育は勉強さえすればよく、それでいながら、与えられた宿題をする時間がないと泣き言を言うような、多くのふつうの子どもたちの受ける教育とはまったく違っていた。しかし、勉強に使う時間より、もっと大切なことがあるということは、言っておかなくてはならない。それは、どれだけ熱心にやるかということだ。習ったことを頭に覚え込ませるのは、それに使った時間ではなくて、覚えようという意志なのだ。幸い僕は、気を散らせるようなことが周りにあっても、あまりそちらに引っ張られることなく、一つのことに集中できた。



もしも僕が、ときどき小学生でもそういう子がいるように、部屋に閉じこもって、両手で耳を塞いで、本に目をくっつけていなければ勉強できないのだったら、僕は何かを学ぶことができたろうか。<sup>62</sup>

この引用にあるような、学校教育を受ける者と、独学で学習する者との対比はマロの一般読者向けの小説においても見受けられた。1873年の小説、『クロチルド・マルトリ』(原題: *Clotilde Martory*, 1873) では、『家なき子』の主人公と類似した教育過程をたどる人物、マルトリ將軍が描かれた。農民で塩の密売をしていた父とともに、フランス各地に塩を売り歩きながら育ったマルトリ將軍は、父の死後には一人で放浪し、凍死寸前の目に逢いながら、フランス各地をあらゆる職に就きながら転々とした。十七歳で革命が起り、職業軍人になった彼は、ナポレオンの指揮下で従軍し続けるが、読み書きを知らないために軍の階級を持たない。二十六歳で読み書きを独学で習得した彼は、二年で中尉にまで昇進した。この「独学者」のマルトリ將軍に対して、学校教育を受けた主人公のサン＝ネレ大佐は、以下のような対比を行う。

準備され、与えられる教育を受け取るために、目と耳をあけていれさえすればよかった私が知っていることと、羊の世話から始めたこの年老いた軍人が学んだこととを比べたとき、私は彼の強固な意志に対する尊敬の念にとらわれた。[……] 私たちの中の何人もが、学校の試験に熱くなり、しかしその試験以来、記憶をかすめたそれらの事柄を年月とともに次第に忘れ、新たな事柄を学ぶ努力はまったくしないで、少尉から始まった時より、大佐になった時の方が無知な人間になってしまっている。彼は、極貧の農民から始まり、一つひとつ階級を獲得するたびに、さらに一つ上の階級を得るに値する人間となっていたが、それはどれほどの苦勞と引換えに成し遂げられたことであろう。<sup>63</sup>

『クロチルド・マルトリ』におけるこの引用においても、学校教育を受けた者の多くに「新たな事柄を学ぶ努力」が欠落しているのに対して、「独学者」のマルトリ將軍の「強固な意志」は尊敬され、その苦勞について言及された。このように、マロは他の小説において、学校教育を受ける者の努力不足と、「独学者」の強固な意志とを対比させ、後者を学習者のあるべき態度として提示した。

第二の点、すなわち、学習者自身が独力で生き、社会的上昇も遂げられる力をつけることは、マロが提示する教育の大きな目的の一つと考えられる。上に挙げた『クロチルド・マルトリ』の引用においても、マルトリ將軍が「一つひとつ階級を獲得するたびに、さらに一つ上の階級を得るに値する人間とな」というように、「独学者」である彼が一步步社会的成功を成し遂げたことが書かれた。それと同様のことが、『家なき子』においても、ヴィタリスから主人公に、次のように教えられた。

偶然にもお前は、ふつうの子どもが大抵小学校や中学校に行っている年頃に、フランスじゅ

うを旅して歩かされているのだから、しっかり目をあけて、よく見て、勉強しなさい。[……] 同時にまた、覚えておきなさい。今、お前はこの社会の階段の一番下の段にいらけれども、自分でそうしようと思えば、少しずつ、もっと上の段に上がることができる。それには、いろんな状況や成り行きも少しは関係があるが、大部分はお前次第なのだ。わしの教えることをよく聞きなさい。わしの忠告をよく聞くのだよ。いいね。そうすれば、後になってお前が大人になった時、お前を育ててくれた母さんからお前を引き離した時には、あんなに怖がらせたこの貧しい音楽家を、懐かしく思い、感謝してくれるようになるかもしれない。私たちの出会いがお前を幸せにすることを、わしは願っているよ。<sup>64</sup>

この引用において、ヴィタリスは、主人公の社会的上昇は可能であり、しかもそれは「お前次第」であると説いた。そして、自分が授ける教育の意味はそのときに理解されだろうと続けた。つまり、ヴィタリスは主人公の社会的上昇を望んでおり、しかしそれは「お前次第」なのであるから、学校に通わない間の主人公の教育は、主人公自身にその力をつけるためのものであることが、この引用から看取できる。さらにこの小説においては、こうした社会的上昇を遂げた歴史上の人物の例として、ジョアシャン・ミュラが挙げられた。ミュラの挿話はこの物語における数少ない歴史教育の場面の一つであるが、その中では「もとは馬屋の世話係をしていたのだが、公爵になり、王様になった<sup>65</sup>」というミュラの成功譚に言及された。

そして何より、『家なき子』では学校に通わない間の経験と学習によって、主人公自身が自力で生きられる人間に成長していく様子が書かれた。たとえば主人公は、少年時代の教育を「少年時代に何度も襲いかかってくる、厳しく重い試練に負けない<sup>66</sup>」力がついたと振り返り、最終章では、大人になった主人公は、ヴィタリスに「みなしごの、危険にさらされた生活の中で、躓くことも、倒れることもなかったのはあなたのおかげです、あなたの教え、あなたのお手本のおかげです<sup>67</sup>」と感謝する。また、第二部冒頭において、ヴィタリスやアキャン家の父親との別離を経験し、保護者を失って一人で生きなくてはならなくなった主人公の、それまでの経験と学習から得た能力について次のように書かれた。

僕はまだ子どもだったが、誰にも支配されない、自分自身の主人だった。[……] ふつうの子どもが馬鹿なことをやらかしても、彼らの後ろには誰かがいて、転びそうになれば手を差し伸べ、支えてくれるし、倒れれば抱き起してくれるが、僕には誰もいない。僕が転べば、倒れるしかないし、倒れたら骨が折れていないかぎり、一人で起き上がらなくてはならない。[……] 子どもだとは言っても、僕はさんざん不幸な目にあったせいで、同じ年頃のふつうの子どもよりも用心深く、慎重だった。それは高い代価を払って得た、僕の強みだった。<sup>68</sup>

この引用においても、学校教育を受ける子どもと、「独学者」のような人生を歩んできた主人公の間の対比がなされている。ここで主人公は、「ふつうの子ども」、すなわち、学校教育を受ける子どもには備わっていない用心深さと慎重さを身に付け、自分の行動は自分で決定する「誰に

も支配されない、自分自身の主人」であると表現された。小説の第二部においては、大人の力を借りず、主人公と近い境遇にある親友のマチアとともに、児童だけの旅が展開され、児童自身の判断と力で生きて行く様子が描かれる。このように、学校に通わない主人公の教育の目的は、自分自身の力で生き抜き、ときにその力で社会的上昇や成功を果たせるようになることとして提示されたと考えられる。

## 6. 結論

以上のような、『家なき子』における「独学者」の表象と、パンセによる先行研究とを合わせて考えながら、『家なき子』における学校教育批判と児童教育の目的について再考したい。

まず、『家なき子』における学校教育批判について考えたい。最初に確認しておきたいのは、マロは、『家なき子』において、近い将来に実施されるであろう「共和国の小学校」の教育内容を否定しているわけではない、という点である。読み書き計算、自然科学、地理歴史、外国語教育、実物教育、公民道德教育などの、当時構想されていた新しい初等教育の教育内容を含有したこの小説が<sup>69</sup>、「共和国の小学校」に通う児童たちを読者として想定し、彼らが受ける教育に沿って書かれたことは、否定できないと思われる。また、マロ自身も共和主義者であって、1870年代初頭以降には、ヴァンセンヌ郡の初等教育視察官も務めていた<sup>70</sup>。こうした作家の伝記的事実からも、1870年代から徐々に推進され、準備されつつあった、第三共和政初期の初等教育改革に対して、マロは基本的に賛同していたと考えられる。

しかしながら『家なき子』では、学校教育において、準備された知識を学習者が何も考えずに鵜呑みにするような受け身の態度は何度も批判され、それと対置されたのが「独学者」の学習態度であった。学習者は何よりもまず、自発的に学習しようとする、積極的な意志を持つことが肝要とされた。そして、先行研究におけるパンセの指摘によると、教授者の側も学習者の積極的な態度を評価し、その自発性を活かすように、また場合によっては、物事に対する好奇心を持つように誘導し、児童自身による物事の発見を促すような教育方法を取るべきであるとされた。つまり、『家なき子』で描かれる学習と教育の場において、より重視されたのは、教授者の意志でなく、学習者の意志の方であると言える。学習者が自発性を発揮せず、努力もせず、教授者が述べる知識を、自分の頭で考えることなくただ受け取るような教育を、マロは「ふつうの子ども」が受ける学校教育として批判的に捉えたと思われる。そして、『家なき子』で提示された児童教育はそれとはまったく異なる教育であった。パンセが主張するような、教師と学習者の信頼関係の中で、学習者の好奇心や身体の発達を大切にする教授方法が採用された点、筆者が本稿で主張したような、時間的、経済的に制限のある中で自己教育を続行する「独学者」のように強固な学習意欲を学習者自身が持つ点、『家なき子』において提示された児童教育のこれら二点の特徴のどちらもが、マロに批判された学校教育とは異なる教育方法であり、態度である。

また、『家なき子』の中でたびたび言われる「ふつうの子ども」が、これからの「共和国の小

学校」に通う児童たちを指し、マロが彼らを小説の読者として想定したのであれば、『家なき子』の中で繰り返された、学習者の模範としての「独学者」の表象には、「ふつうの子ども」である読者にも「独学者」の学習態度を見習ってほしいという作者の意図が込められていたのではないだろうか。1870年代において「独学者」の文化はすでに失われつつあり<sup>71</sup>、初等教育の義務が制度化すれば、理論的には「独学者」のような識字過程をたどる者はフランスには存在しなくなる<sup>72</sup>。『家なき子』の主人公のような「独学者」の学習を、「ふつうの子ども」にも読書を通して伝達できるように、学習の模範として作品内に提示した可能性がある。

つぎに、『家なき子』における児童教育の目的について考察したい。『家なき子』における児童教育では、学習と教育の場における児童の自発性と意志が重視された。では、その学習と教育が何のためにあるかといえ、まずは児童自身の能力を、身体、知性、職業の各方面において育むことにある。主人公は旅の途中で出会う大人たちから学ぶことや、自分自身の経験により、身体を鍛え、読書や見聞から知識を深め、巡業の役者、興行師としての技術を磨いていく。そして、その培われた能力によって、自分自身で考え、判断し、行動して、「みなしごの、危険にさらされた生活」の中で生き抜く力が備わっていく。さらにヴィタリスの言葉は、主人公の社会的上昇でさえも、主人公の意志と努力次第で可能であると主人公に諭し、そのために教育があるのだと示唆した。つまり、学習や教育は、児童自身が考え、生き抜いていく能力を付けることが目的とされ、さらにその先にある社会的上昇さえも目指しうるものであり、児童個人の将来と幸福が重視されている。

『家なき子』が発表された1870年代のフランスでは、普仏戦争敗北直後のナショナリズムの高揚の中で、しばしば児童は「国家の子ども」と見なされ、国家が初等教育や「共和国の司祭」である小学校教師を通じて教える価値を追随する態度が、学習者のあるべき姿であるとされた<sup>73</sup>。そしてその児童観は初等教育の内容や当時の児童文学作品にも大きな影響を与え<sup>74</sup>、1870年代に発表された多くの児童文学作品には、国家主義や愛国主義に準じる内容が含有された<sup>75</sup>。

しかし、『家なき子』においては、国家が学校教育を通して教え込む価値を鵜呑みにするような学習者は提示されない。そして大人になって、国家のために身を捧げるような登場人物も存在しない。『家なき子』における児童教育では、教育の場における児童の意志や自発性が重視されるとともに、その目的においても、児童個人の将来と幸福が尊重された。その意味において、『家なき子』で提示された児童教育は個人主義的な性格を持ち、児童一人ひとりを尊重する教育であると言える。これからのフランス共和国を支える児童の一人ひとりが、自分の頭で考え、行動できる人間となって、自分自身の人生を切り開く力を持ってほしいというマロの希望が、『家なき子』という小説を通して表現されたと考えられる。

## 注

引用の訳は、既訳も参考にしつつ筆者が行った。

『家なき子』の原文テキストは以下を使用し、引用の際は括弧内に示す略号を用いる。

Hector MALOT, *Sans famille*, tome premier, Paris, E. Dentu, sixième édition, 1879 (SFI) .

Hector MALOT, *Sans famille*, tome second, Paris, E. Dentu, sixième édition, 1879 (SFII) .

- 1) 「ジュール・フェリー法」とは、正確には「無償を定める 1881 年 6 月 16 日の第二法律」、及び、満六歳から満十三歳までの男女の児童の就学義務と小学校の教育課程と管理面での世俗化を図った「1882 年 3 月 28 日の法律」を指す。それ以後の小学校を、フランスの一般的な教育史概説書では « école de la République », « école républicaine », « école de Jules Ferry » と呼ばれ、これを指し示すときに「共和国の小学校」という言葉を使用した。
- 2) Lucette CZYBA, « Aventure, famille et école dans *Sans famille* d'Hector Malot », *L'Aventure dans la littérature populaire au XIX<sup>e</sup> siècle*, Lyon, Presse Universitaire de Lyon, 1985, p.139-151. Christa DELAHAYE, « La Question sociale dans *Sans famille* » *Cahiers Robinson*, No.10, Arras, Presse de l'Université d'Artois, 2001, p.29-37.
- 3) 拙稿、「エクトール・マロ『家なき子』『家なき娘』における児童教育」『関西フランス語フランス文学』、第 16 号、p.15-27.
- 4) Yves PINCET, *Sentiments, éducation, humanitarisme, dans l'œuvre romanesque d'Hector Malot*, Thèse de doctorat, Université de Rouen, 1993. p.185-251. とくに p. 189-219.
- 5) « le courant pédagogique novateur » *Ibid.*, p.215.
- 6) *Ibid.*, p.195. パンセは、本稿でも後に言及するマロの小説『クロチルド・マルトリ』(1873 年)の中に「独学者」に対する礼賛を読み取った。しかしながら、『家なき子』の中の「独学者」の表象については、言及されていない。
- 7) *Ibid.*, p.191-192.
- 8) *Ibid.*, p.196-199.
- 9) *Ibid.*, p. 196. パンセは、『家なき子』第一部第七章における村の学校の描写が、現実の学校を反映していると考えられる根拠として、1846 年のアン県における初等教育視察官の報告を例に挙げた。したがって、パンセの博士論文では、十九世紀前半のフランスにおける小学校の実態が、小説の描写との比較対象として挙げられたと言える。
- 10) *Ibid.*, p.191-192.
- 11) « celui [= le maître] qui se comporte comme un père », *Ibid.*, p.197.
- 12) *Ibid.*, p.197.
- 13) *Ibid.*, p.204-215.
- 14) *Ibid.*, p. 216-217. マルゲリットとシェルエルについては、マロの回想録『私の小説の物語』の中で言及された。(Hector MALOT, *Le Roman de mes romans*, Flammarion, 1896, réédité dans les *Cahiers Robinson*, n° 13, Arras, Presses de l'Université d'Artois, 2003, p.118.)
- 15) Yves PINCET, *op.cit.*, p. 216-217.
- 16) 拙稿、前掲「エクトール・マロ『家なき子』『家なき娘』における児童教育」.
- 17) 喜安朗『近代フランス民衆の＜個と共同性＞』、平凡社、1994 年、p.201-203, 211.
- 18) 本稿における「独学者」に関する記述は、おもに以下の研究に依拠している。喜安朗、前掲『近代フランス民衆の＜個と共同性＞』。木下賢一『第二帝政とパリ民衆の世界——「進歩」と「伝統」のはざままで』、山川出版社、2000 年。また、以下のフランス民衆図書館史

- 研究と読書史研究も併せて参照した。(フランス民衆図書館史研究) 榎原茂「文明化のソシアビリティ——19世紀フランスの民衆図書館運動と農村」、『歴史学研究』752号、2001年、p.13-27. Noë RICHTER, « Aux Origines de la lecture publique—Naissance des bibliothèques populaires », *Bulletin des bibliothèques de France*, n° 4, 1978. Philippe MANDEVILLE, « Les Bibliothèques populaires de la Seine-Inférieure au XIX<sup>e</sup> siècle », *Annale de Normandie*, 28<sup>e</sup> année n° 3, 1978, p. 259-274. Martyn LYONS, « Les Bibliothèques et leurs lecteurs », *Le Triomphe du livre : une histoire sociologique de la lecture dans la France du XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Promodis, 1987, p.169-192. Roger BELLET, « Un Siècle de Bibliothèque Populaire » *Le Roman populaire en question : acte du colloque international de mai 1995 à Limoges*, Limoges, PULIM, 1997, p.305-314. (読書史研究) マーティン・ライオンズ著、田村毅訳「十九世紀の新たな読者たち——女性、子供、労働者」、『読むことの歴史——ヨーロッパ読書史』、大修館書店、2000年、p.445-490. Noë RICHTER, *L'Éducation ouvrière et le livre, de la Révolution à la libération*, Bibliothèque de l'Université du Maine, 1982. Noë RICHTER, « Lecture populaire et lecture ouvrière : deux composantes du système de lecture français », *Bulletin des bibliothèques de France*, tome 28, n° 2, 1983, p.123-134.
- 19) 喜安朗、前掲『近代フランス民衆の＜個と共同性＞』p. 204-211.
- 20) 1833年6月28日の初等教育法（ギゾー法）の第九条と第十条に以下のように規定された。「＜第九条＞コミューンはすべて、それ自体でか、あるいは隣接する一つまたはいくつかのコミューンと連合するかして、少なくとも一校の基礎初等学校を維持しなければならない。地域の事情からして可能であろう場合には、公教育大臣はコミューン議会の意向を聴取したのち、国によりみとめられた宗派の一つにとくに充当された学校をコミューンの学校として許可することができるであろう。＜第十条＞県の首邑たるコミューン、および人口が六、〇〇〇人をこえるコミューンは、なおそのほかに上級初等学校一校をもたなければならないであろう。」(梅根悟監修『世界教育史大系 10 フランス教育史 II』、講談社、1975年、p. 34.)
- 21) ギゾー法は子どもの就学を親に義務付けた法律ではなく、第九条と第十条に掲げられた小学校の設置義務を果たさないコミューンに対し、制裁措置も規定されなかった。ギゾー法の制定によって、小学校の総数は増加し、就学児童数も増えた。その意味でギゾー法は成果を挙げたが、県ごとの小学校の普及率が不均衡であった点、男子に比べ女子の初等教育の普及は進まなかった点、就学児童の中に登録のみの者や不規則にしか出席できない者も含まれる点などにおいて、初等教育の普及の徹底とは言えなかった。(同上、p.39-42.)
- 22) 喜安朗、前掲『近代フランス民衆の＜個と共同性＞』、p.200-211.
- 23) マーティン・ライオンズ、前掲「十九世紀の新たな読者たち」、p.483.
- 24) 同上、p.484-489.
- 25) とくに以下の文献を参照のこと。榎原茂、前掲「文明化のソシアビリティ」。Noë RICHTER, op. cit., « Aux Origines de la lecture publique ».
- 26) Martyn LYONS, op.cit., « Les Bibliothèques et leurs lecteurs », p.169-171.
- 27) 自由度の高い図書館の先駆的な代表例として、1861年、理工科協会（Association polytechnique）の講義を受講していた、植字工のジラルールを中心としたパリの労働者グループにより、理工科学校の教師ファヴェ大佐や、理工科協会の指導者ペルドネの助力を受けて、パリ第三区に教育友の会図書館が創設された。1860年代初頭は、教育友の会図書館の創設ばかりでなく、学校図書館の制度化（1862年）、民衆図書館設置運動に中心的役割を果たしたフランクリン協会の創設（1862年）、オー＝ラン県市町村図書館協会の結成（1863年）な



- ど、民衆図書館設置運動にとって重要な転換期となる時期であった。(槇原茂、前掲「文明化のソシアビリテ」. Noë RICHTER, op. cit. « Aux Origines de la lecture publique ».)
- 28) 喜安朗は、読み書きの習得にとどまらず、創作活動や社会活動によって自己表現した「独学者」について、次の五種の人々を挙げた。「労働者詩人」と呼ばれる詩作に熱中した人々、新聞『アトリエ』の編集者及び寄稿者のグループ、新聞『リュージュ・ポピュレール』の編集グループ、サン＝シモン派の民衆階層のレベルでの活動を行った人々、エチエンヌ・カベのイカリア派の運動を支えた人々。(喜安朗、前掲『近代フランス民衆の＜個と共同性＞』 p. 219-255.)
- 29) 木下賢一、前掲『第二帝政とパリ民衆の世界』、p.12-21.
- 30) 同上、p.21-51.
- 31) 木下賢一は、1860年代の労働運動とそれを先導した五人の「労働者エリート」の活動の関連に焦点をあてた。(同上、p.11-130, 169-286.)
- 32) 谷川稔『フランス社会運動史——アソシアシオンとサンディカリズム』、山川出版社、1983年、p.126.
- 33) 木下賢一、前掲『第二帝政とパリ民衆の世界』、p.12-51. 鹿島茂『怪帝ナポレオン三世——第二帝政全史』、講談社学術文庫、2010年、p.466-472. 柴田朝子「第一インター前夜のパリ労働者階級の状態について」、『史学雑誌』68編12号、1959年、p.71-74. David I. KULSTEIN, “The Attitude of French workers towards the Second Empire”. *French Historical Studies*, Vol.II, No.3, 1962, p.373-375.
- 34) Hector MALOT, « Les Ouvriers dans la rue », *Opinion Nationale*, le 14 janvier 1862.
- 35) 『イギリスの現代生活』の第十章「夜のロンドン」と第十一章「街」には、ロンドンの酒場の様子や貧しいイースト・エンドの界限についてのルポルタージュが見られる。Cf. Hector MALOT, *La Vie moderne en Angleterre*, Paris, Michel Lévy Frères, 1862, p.227-268.
- 36) 先行研究でしばしば参照されたのは以下の文献である。『オピニオン・ナショナル』が当時成功を収めた新聞であったこと、編集長アドルフ・ゲルーの周囲には、サン＝シモン主義者や社会主義者をはじめとした「リベラルな傾向」の人々が集まり編集を担った点には言及された。しかしルヴァロワの証言は、マロをはじめ編集に関わった人々の文学作品に関するものが中心的な位置を占めている。Jules LEVALLOIS, *Milieu de siècle, Mémoire d'un critique*, Paris, Librairie illustrée, 1898, p.162-184.
- 37) MAIRIE DE FONTENAY-SOUS-BOIS, *Hector Malot 1830-1907, Un Écrivain fontenaysien*, Fontenay, Imprimerie municipale, 2003. p.XI.
- 38) Hector MALOT, op.cit., *La Vie moderne en Angleterre*, p.142-146.
- 39) 『クーリエ・フランセ』は、社会主義者オーギュスト・ジャン＝マリー・ヴェルモレル (Auguste Jean-Marie Vermorel, 1841-1871) が1861年に創刊した日刊紙で、マロは1867年7月から11月の間、ほとんど毎週 Usbeck という偽名を使用して第二帝政を激しく攻撃するコラムを執筆した。その批判内容は、当時の公教育大臣ヴィクトール・デュルイの教育政策やフランスの対メキシコ外交政策など、多岐にわたった。
- 40) 1867年6月6日、ロンシャン競馬場において、ポーランド青年のアントニ・ベレゾフスキ (Antoni Berezowski, 1847-1916) がロシア皇帝アレクサンドル二世に発砲した暗殺未遂事件。裁判は同年7月15日に行われ、ベレゾフスキはニュー・カレドニアでの徒刑に処された。(Cf. *Affaire Berezowski, Cours d'assise de la Seine, Audience du 15 juillet 1867, plaidoirie et réplique par M<sup>e</sup> Emmanuel Arago*, Paris, Typographie de Rouge frères Dunon et Fresné, 1867)



- 41) 1867年2月、サン＝テチエンヌに新設された二つの民衆図書館のほとんどすべての蔵書について、市の有力者たちから懸念が示された。それらの蔵書とは、ラブレール、ヴォルテール、ルソー、ミシュレ、ルナン、ジョルジュ・サンド、ウジェーヌ・シュエ、フーリエ、ブルードン、ラムネなどの著作で、彼らによれば「不健全で反社会的、かつ反カトリック的」な書物であった。同年6月、市の有力者たちにより二百の署名を集めた嘆願書が上院に提出されたが、6月25日の上院での審議においてはサント＝ブーヴらが嘆願書に反対を表明し、思想の自由を擁護した。上院は嘆願書を公教育省に送致したが、公教育大臣のヴィクトル・デュリュイは嘆願書を却下し、蔵書も取り除かないものとした。(Cf. Roger BELLET, op.cit., « Un Siècle de Bibliothèque Populaire », p.310-312. Martyn LYONS, op.cit., « Les Bibliothèques et leurs lecteurs », p.184-185.)
- 42) « Dans ce procès, curieux à plus d'un titre, et qui contient d'utiles enseignements politiques, il a été prononcé une parole regrettable par M. le président Berthelin, qui croit qu'il n'est rien de plus dangereux souvent une demi-instruction. Si M. le président Berthelin a voulu dire qu'il est plus agréable de sortir de l'École polytechnique ou de l'École de droit, que de l'école mutuelle, nous sommes entièrement de son avis[...]. Si au contraire, il a voulu dire que Berezowski ayant reçu une éducation complète n'eût point essayé de tuer l'empereur de Russie, nous lui demandons la permission de contester cette opinion, qui, du particulier ramenée au général, tendrait comme premier pas à supprimer les bibliothèques populaires, et plus tard comme dernière étape, arriverait sans doute à supprimer les écoles primaires. Au domicile de Berezowski, on a trouvé le livre de Mariana sur le régicide, le *livre des esprits*, des numéros du *Siècle*, et du *Moniteur* du soir ; et de ce singulier mélange qu'on a sans doute conclu aux dangers d'une demi-instruction. [...] instruction comme demi-instruction, même résultat sans doute. Et notez que cette opinion [...] n'est point exclusivement personnelle à M. le président Berthelin, puisque c'est celle qui vous a valu la pétition contre la liberté des bibliothèques. [...] La pétition de Saint-Etienne, la discussion du Sénat, les paroles à la cour d'assises, il y a là une coïncidence fâcheuse : Décidément l'instruction aussi bien que l'éducation ont eu du malheur cette semaine. » (USBECK « La Semaine », *Courrier français*, le 22 juillet 1867.)
- 43) 相互学校とは助教法（モニトリアル・システム）を採用し、読み・書き・計算を生徒に教授した民衆のための学校を指す。生徒をいくつかの集団に分け、生徒の中の年長者や学力の高い者（モニター）が、教師から教えられたことを各集団に教える方式を取る。十九世紀初頭にイギリスで発祥したこの方式は、プロイセンなど、他国での民衆教育にも適用された。フランスでは、復古王政期に民衆教育の画期的な教育方法として精力的に導入され、「基礎教育協会」が設立されるに至ったが、1853年には公式に放棄された。（児美川佳代子「近代イギリス大衆学校における一斉教授の成立について」『東京大学教育学部紀要』32号、1993年、p. 43-52. 大崎功雄「相互学校システム」をめぐる「教育学論争」とF.A.W. ディースターヴェーグ——プロイセンにおける「近代学校システム」形成過程の研究』『日本の教育史学』49号、2006年、p.149-161. 梅根悟監修、前掲『世界教育史大系10 フランス教育史II』、p.25. Pierre ALBERTINI, *L'École en France XIX<sup>e</sup>-XX<sup>e</sup> siècle - de la maternelle à l'université*, Paris, Hachette, 1992, p.21-22.)
- 44) *SFI*, p.316-317.
- 45) 喜安朗によれば、「独学者」たちの学習は、職場や職人宿、居酒屋などにおける新聞、戯曲

等の朗読に触発された場合や、すでに個人的な読書を行う者の蔵書に刺激された場合など、その契機は職人同士、労働者同士の絆ときわめて密接なつながりを持っていた。(喜安朗、前掲『近代フランス民衆の〈個と共同性〉』、p. 204-223.)

- 46) *SFII*, p.60-61.
- 47) 『家なき子』において、マジステールは仲間の炭鉱夫から変わり者扱いされていたが、第二部第四章において発生した出水事故の際に、冷静な判断により炭鉱夫たちを救助へと導いたのはマジステールであり、その判断力や知識量に対して炭鉱夫たちから敬意を払われることとなった。「マジステールをさんざんあざけり、やっつけていたような人たちが、一変してこんなにほめそやすのを見て、僕は本当にびっくりした」という主人公の言葉は、よくも悪くも、マジステールが他の炭鉱夫とは異質な存在として表されたことを示している。( *SFII*, p.82.)
- 48) 拙稿、前掲「エクトール・マロ『家なき子』『家なき娘』における児童教育」、p.17, 21-22.
- 49) *SFII*, p.153.
- 50) 南フランスのアジャンに生まれたジャスマンは、オック語で詩を書き、高く評価された労働者詩人である。本業は床屋であった。(二宮フサ「訳注」、『家なき子[下]』、偕成社文庫、1997年、p.402. Alphonse VIOLETT, « Jacques Jasmin, coiffeur à Agen », *Les Poètes du peuple au XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Imprimerie française et étrangère, 1846, p.291-311.)
- 51) *SFII*, p.154.
- 52) *SFII*, p.154.
- 53) *SFII*, p.156.
- 54) *SFI*, p.90.
- 55) イヴ・パンセは、「子どもの旅」という児童文学作品の主題そのものが、職人のフランス巡歴から着想を得たものであると指摘した。また、ファビエンヌ・ガルヌランは、『家なき子』における、リムーザン地方クルーズ県の架空の寒村、シャヴァノンの描写や、そこでの主人公の養家での生活の描写を考察する際に、マルタン・ナド (Martin Nadaud, 1815-1898) の『ある出稼石工の回想』(原題: *Mémoires de Léonard, ancien garçon maçon*, 1895) を重要な資料とした。ナドの父親は、『家なき子』の主人公の養父と同様に、クルーズ県の寒村の出稼石工であり、ナド自身も父や同郷の石工とともにパリで石工として働くために、故郷を後にして歩きづめの旅をつづけ、一種のフランス巡歴のような生活を送る点で、『家なき子』の主人公と類似している。(Cf. Yves PINCET, *op.cit.*, p.188. Fabienne GARNERIN, « Sans famille et la vie dans la Creuse vers le milieu du XIX<sup>e</sup> siècle », *Hector Malot et le métier d'écrivain*, Paris, MAGELLAN et Cie., 2008, p.128-148.)
- 56) フランスを巡歴する職人たちは、所属する職人組合によって決められた宿場において、決められた職人宿に宿泊した。宿場では仕事と住まいが与えられたばかりでなく、教育の機会があり、各宿場の篤志の教員や理論家、兄弟子などから、幾何学や建築、用器画など、必要な知識と技術を学んだ。学校教育では学ぶことのないこれらの知識と技術を、職場において習得し、別の職人に伝達していった点において、巡歴職人もまた「独学者」の要素をはらむ人々であったと言える。(リュック・ブノワ著、加藤節子訳『フランス巡歴の職人たち——同職組合の歴史』、白水社、文庫クセジュ、1979年、p.94-95.)
- 57) *SFI*, p.82.
- 58) Yves PINCET, *op.cit.*, p.196. Guillemette TISON, *Le Roman de l'école au XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Belin, 2004, p.13. ティゾン は、『家なき子』第一部第八章において、ヴィタリスがナポリの

王宮でジョアシャン・ミュラ (Joachim Murat, 1767-1815, ナポリ王在位 1808-1815) と知り合った主人公に語ったことから、この物語の時代設定は十九世紀前半であり、村の小学校とその教師についても、その時代の小学校の様態が反映されていると推定した。

- 59) *SFI*, p.82.
- 60) 喜安朗によると、たとえば『職人組合の書』(原題: *Livre du Compagnonnage*, 1838) を著したアグリコル・ベルディギエ (Agricole Perdiguer, 1805-1875) は、その回想記において、郷里に近い小村の小学校に二、三年通ったが、唯一の教師が体罰をふるい、非常に恐怖を感じたこと、その後パリ出身の教師のもとに通ったが、教育方法が整っていなかったことなどを書いたという。また、喜安も一次資料として参照したアルフォンス・ヴィオレ (Alphonse Viollet, 1798?) の『十九世紀の民衆詩人』(原題: *Les Poètes du peuple au XIX<sup>e</sup> siècle*, 1846) では、不規則に七年間も小学校に通い識字化を遂げた者や、三年間冬季の間に小学校に通ったが識字化に失敗した者など、小学校での学習の困難さがしばしば語られた。また『家なき子』よりも後に書かれた手記ではあるが、マルタン・ナドの『ある出稼石工の回想』でも、ナドが文字を習うために、村の複数の教師のもとを転々としたことが語られた。(喜安朗、前掲『近代フランス民衆の〈個と共同性〉』、p. 207. マルタン・ナド著、喜安朗訳『ある出稼石工の回想』、岩波書店、岩波文庫、1997年、p. 25-45. Alphonse VIOLETT, *op.cit.*, p. 2 et 101.)
- 61) Yves PINCET, *op.cit.*, p.193-195.
- 62) *SFI*, p.90-91.
- 63) Hector MALOT, *Clotilde Martory*, Michel Lévy Frères, 1873, réédité dans *Œuvres d'Hector Malot - 3*, Amiens, Encre Édition, 2012, p.72.
- 64) *SFI*, p.93-94.
- 65) *SFI*, p.95.
- 66) *SFI*, p.91.
- 67) *SFII*, p.408.
- 68) *SFII*, p.1-2.
- 69) この点については、博士学位論文の一部で詳細に論じた。拙論「『家なき子』、その原典と初期邦訳の文化社会史的研究」、博士学位論文、京都大学大学院人間・環境学研究科、2016年、p.37-105.
- 70) MAIRIE DE FONTENAY-SOUS-BOIS, *op.cit.*, p.XI-XII.
- 71) 谷川稔によると、産業革命が進行するにつれ、機械体系の導入により高度の熟練技術に支えられた職人共同体が解体し、鉄道網の完成により職人のフランス巡歴の意味が根底から覆されてしまうのは、第二帝政期のことであった。したがって、フランス巡歴の中で労働の間に知識や技術を獲得する職人の文化は、1870年代には失われつつあったと言える。また、1841年3月22日の児童労働法においても、「工場、製作所あるいは仕事場に雇用される児童」について、十二歳以下の児童は公立または私立の学校への通学義務を規定するなどの教育条項があった。この条項は、「徒弟奉公の契約に関する1851年2月25日の法律」により適用範囲が広げられ、具体的に「一日二時間の教育」を受けることも規定された。このように法律上では、労働する児童も就学させるように規定されてきたのであり、1870年代初頭において、初等教育の義務化を規定するための法案が提出されていた。(谷川稔「失われゆく世界——職人共同体の解体をめぐって」、前掲『フランス社会運動史』、p. 51-57. 尾上雅信「19世紀フランスにおける「児童労働法」教育条項に関する考察——産業革命期民衆教育史の一

断面」、『岡山大学教育学部紀要』80巻1号、1988年、p. 215-228.）

- 72) マロは1893年に上梓した『家なき娘』においても、小学校に通わない主人公の少女、ペリーヌを描いている。その場合、ペリーヌはフランスではなく、インドで少女時代を送ったという設定がなされている。
- 73) フェリー法以後の世俗化した初等教育の教師は、新しい科学知識と世俗的モラルの体現者として期待された。彼らはカトリック教会の司祭に代わる新たな「司祭」として、初等教育を通じ、統一言語としての国語（フランス語）、祖国の観念、科学的世界観を児童に教授することで、共和主義的公民の育成に資することを求められた。また、そのような小学校教師を生徒たちは追従すべきとされ、たとえば1887年の「道徳」科中級課程の学習指導要領においては、「学校の中での子ども」の項に「教師への義務」が規定された。（谷川稔、『十字架と三色旗——もうひとつの近代フランス』、山川出版社、1997年、p.186-202.）
- 74) たとえば、1870年代から1880年代初頭には、初等教育の「軍事化（militarisation）」が起こり、とくに男子の教育において、体育と軍事教練が同一視されるなど、将来の兵士の育成を視野に入れた初等教育が主張された。教室内の授業においても、道徳科では「祖国の義務」を教授するように規定され、地理教育、歴史教育、国語としてのフランス語教育、国民的英雄を讃える唱歌を歌わせた音楽教育など、多くの教科教育の中に祖国フランスへの帰属意識と愛国心の涵養を目指す内容が含まれた。（Maurice CRUBELLIER, *L'Enfance et la jeunesse dans la société française 1800-1950*, Paris, Armand Colin, 1979, p.194. Michèle ALTENE, « Un Siècle d'enseignement musical à l'école primaire », *Vingtième Siècle, Revue d'histoire*, No.55, juillet-septembre 1997, p.3-15. 亀高康弘「身体教育と国家・カトリック・共和派——フランス第三共和政期に見る」、『身体と医療の教育社会史』京都、昭和堂、2003年、p.25-51. 渡辺和行「英雄とナショナル・アイデンティティ——第三共和政フランスの歴史教育とナショナリズム」、『ネイションとナショナリズムの教育社会史』、京都、昭和堂、2004年、p.285-320.）
- 75) そのような児童文学作品の例として、P - J・スタール（Pierre Jules Hetzel, dit P.-J. Stahl, 1814-1886）の『マルーシア』（原題: *Maroussia*, 1878）、そして、G・ブリュノ（Augustine Fouillée, dite G. Bruno, 1833-1923）の『二人の子どものフランス巡歴 - 義務と祖国』（原題: *Le Tour de la France par deux enfants*, 1877）の二作品を、祖国愛を鼓舞する物語として挙げることができる。また、普仏戦争後のフランス児童文学出版や児童雑誌出版の状況については、以下の文献に詳しい。Francis MARCOIN, *Librairie de jeunesse et littérature industrielle au XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Honoré Champion, 2006, p.597-668. Alain FOURMENT, *Histoire de la presse des jeunes et des journaux d'enfants (1768-1988)*, Paris, Édition Eole, 1987, p.123-128.